

朝を ひらく

檜ひのきがある。花は一輪、うす暗い床の間に、とき色のおいを放っていた。死を間近にした寺僧が横たわっている。鶴のように瘦せこけたその老人のそばで、息子は庭のアジサイの茂みをたたく雨脚を聴きながら、目を閉じていた。

「おい、禅宗は清いぞ!」。

禅寺に下宿中の兄からの手紙で、にわかにかが動いたのは、浄土真宗寺院の三男として生まれたこの寺僧が13歳の時だった。清い宗教に強く惹かれると、行動は速かった。禅門で得度を申し入れる。その後の事跡は、真つすである。高校、大学、禅の専門僧堂、そして徴

ある寺僧の決断

永田 円了
真国寺住職



兵で満州(中国東北部)へ従軍もした。

人間には志というものがあ
る。妄執まがとくといってもいい。この
妄執が人生の味。「この寺に來
たとき……」、かすれた声では
あるが、寺僧は息子に何かを伝
えようとしている。「ずいぶん
迷った。自分のしたことは正し
かった」「もしそうしていなか
ったら、私は必ず後悔した」。

明かり障子の外は、雨もあがり
陽がようやくやくかげろうとしてい
た。

当時の男にしては珍しく、こ
の寺僧には出世欲がなかった。
清い宗教にあこがれ、人間関係
の煩わしさを嫌い、静かに孤独
を樂しめる寺に入りたかった。
理想的な寺があった。檀家だんかゼ
ロ、生い茂る樹木と数千の墳墓
に囲まれた寂寥感のある堂宇。
一言でいえば貧乏寺である。

ここだと感じた。29歳のとき
である。しかし当時その寺には、
住職を亡くした婦人と2人の子
が住んでいた。さあどうする。
宗教哲学は学んだ。禅も修行
した。がこの目の前の現実をど
うする。この寺族を排除し、お
のれの思い通りの住職になる
か。それとも母子を引き受け、
荷を担いで行くか。時は太平洋
戦争勃発の前年、大きな決断だ
った。

理と情、仙界と俗界で揺らぐ
心。煩惱を超越するだけが解脱
の道なら、人間はただの木石鳥
獣になればいい。人間を載せて
養っているこの世を、身体ごと
受け入れて生きられないなら、
清い理念も砂上の楼閣。寺僧
は、知らず知らずのうちに男子
の鉄腸が解けてゆくのを感
じた。

しばらくして寺僧と婦人の間
に、新たに2人の子が誕生し
た。そして結実した物語の中
で、私はこの寺僧の息子とし
て、この世に生をうけた。

「一粒の砂に世界を見、一輪
の野の花に天国を見る。君の手
のひらに無限をつかみ、一刻の
中に永遠を感じる」(ウイリア
ム・ブレイク)。人は死を目前
にして、魂が生きたある一刻を
思い起こそうとする。荷を担ご
う、と決めた思いが、この寺僧
の人生に意味を吹き込んだので
あろうか。

荷を担ぎ人生に意味